

当院救急外来における高齢血流感染症患者の予後予測因子の検討

◎高柳 棕¹⁾、齊藤 良子¹⁾
富山赤十字病院¹⁾

【はじめに】血流感染は種々の感染が原因となって菌血症を呈した状態である。高齢者では若年者に比べ発症リスクが高く、近年の高齢化に伴い感染者増加が見込まれる。救急外来では特に入院加療を必要とする場合が多く、抗菌薬選択治療や生命に関わる重要な感染症である。今回、当院救急外来の高齢者血液培養陽性例について、短期的な院内死亡の予測因子を遡及検討した。

【対象】2019年1月から2021年12月に当院救急外来より入院の227例(65歳以上、入院48時間以内の血液培養採取実施、汚染菌の場合は除外といった各種条件該当者)を対象とした。血液培養検査はBact/ALERT 3D(bioMérieux)で実施、菌種同定・感受性検査はMicroScan WalkAway96(Beckman coulter)又は外部委託による質量分析(Bruker)を用いた。各種解析はEZR(Ver1.55)を使用した(両側検定、 $p < 0.05$ を統計学的有意とした)。

【結果】対象の患者背景は、平均年齢 82.7 ± 7.5 歳、男性119例(52%)であった。30日生存群は188例(泌尿器66例、肝胆道系46例、皮膚軟部組織18例、呼吸器14例、腹腔内

11例、その他10例、不明23例)、死亡群は39例(呼吸器9例、皮膚軟部組織7例、泌尿器5例、肝胆道4例、腹腔内3例、その他6例、不明5例)であった。検出菌は生存群で206株(内訳E.coli78株、K.pneumoniae28株、溶連菌群21株、S.aureus20株、その他59株)、死亡群で46株(内訳E.coli7株、K.pneumoniae6株、S.aureus6株、溶連菌群3株、P.aeruginosa3株、C.albicans3株、その他11株)であった。30日以内院内死亡を従属変数とし年齢、性別、qPitt、qSOFA、市中感染の該当などを説明変数とした多変量解析を実施した結果、年齢(係数:0.0708、 $p=0.01731$)、E.coli血流感染症(係数:-1.1701、 $p=0.01612$)、血小板数(係数:-0.0097、 $p=0.0020$)、qPitt(係数:0.9966、 $p < 0.0001$)が独立した予測因子である可能性が示唆された。

【考察】qPittはバイタルサイン等から迅速・簡便に算出可能な指標である。本指標に関する検討は少ないものの、臨床への適応は比較的容易と考えられる。今後その他の関連因子との組み合わせた更なる検討が必要と思われた。

(連絡先) 076-433-2222 (内線)